

# パリのアメリカ先住民

——カントの『判断力批判』における具体例の役割——

加 藤 哲 弘

記述は簡潔でありたいので、  
実例を挙げるのは少しだけにするように  
自分を抑制しなければならない。  
カント『判断力批判』第49節

『判断力批判』のようなテキストを扱う際に、そこに登場する具体例に焦点を合わせるような議論を展開するとすれば、当然のことながら、ある種のルール違反であるとの謗りを受けることは避けられないだろう。言うまでもなく、カントの「批判」は「超越論的」な哲学にもとづく作業であり、したがって、そこで解釈者が念頭におかなければならないのは、偶々引かれた例証ではなく、そのような具体的な事例が成立するための可能性条件をめぐる議論だからである。しかし、著者であるカントの意図に配慮したこのような解釈姿勢が、逆に、この魅力的な具体例に富んだ『判断力批判』のテキストが発揮する意味作用の可能性を狭めてしまうことはないのだろうか？ カントはけっして「実例」をおろそかにしていたわけではない。むしろ彼はそれを楽しんでいたようにも見える。アメリカ先住民、アルプスの山々、スマトラの胡椒園、フリードリヒ大王の詩、あるいは、ビールの泡に驚くインド人に至るまで、このテキストのなかにちりばめられている多様で魅力的な具体例は、そのような解釈では明らかにできない何か特別な役割を担っているのではないか？

ここでわたしは、これまで積み重ねられてきた、いわゆる「内在的な解釈」

の意義を全面的に否定するつもりはない。しかし、そのような解釈は、カントの主張を外的なコンテキストから切り離して、それ自体を絶対化したり、閉じた世界のなかで権威化したりしてしまいがちだ。たしかに、カントの考えによれば、「超越論的哲学」は具体的な歴史的現実には左右されないはずのものだ。しかし、それが1790年に公刊されたものであり、その結果、その当時の社会的な枠組みからの拘束力を受けているということも否定はできない。また、じつはカント自身、解釈によって「著者が自分を理解していたのと同じく、またはそれ以上に著者を理解する」ことが可能であると考えていた<sup>(1)</sup>。もしかしたら不遜な行為ととられるかもしれないが、『判断力批判』をまるで文学作品や芸術作品のように文体分析を試みたり、あるいは歴史学的な史料のようにコンテキストとの関連付けをしたりしてみればわかるように、カントのテキストのなかでは、「具体例」だけではなく、多くの「指標」が、カント自身の意図を越えて現実の社会史的環境を指示している。

本稿では、ハイデガーのカント解釈をもとにパノフスキーが明らかにした解釈の本質を念頭において<sup>(2)</sup>、ある程度解釈が暴力的になることを意識しながら、これまでの「内在的な解釈」では無視されがちだったこのような具体例を意図的に浮かび上がらせることにする。論点を絞り込むために、採り上げるのはわずかに1例だが、コンテキストへと開かれたこの小さな「窓」を通して、カント自身が意識していなかった、テキストの「本来の意図」に、これまでとは違ったかたちで接近するための手がかりを探りたい。

## 1 パリのアメリカ先住民

1666年のこと、北アメリカのフランス植民地から、イロクォイと呼ばれるアメリカ先住民がパリにやってきた。イロクォイとは、セント・ローレンス川流域からオンタリオ、エリー両湖周辺の森林地帯に居住し、モホーク、セネ

カ、カユガといったイロクォイ系言語を話す先住民たちの同盟集団の名前である。彼らは、1570 年以後、「サチェム」あるいは「セイチャム」と呼ばれる各世襲首長たちを構成員とする高度の政治組織（「ファイヴ [のちにシックス]・ネイションズ」あるいは「イロクォイ連盟」）をもち、一体となって近隣諸部族との武力闘争や和平締結を行ったり、またアメリカ植民地開拓者に敵対したりしていた。ヨーロッパでイロクォイが知られるようになったのは、1754 年から 63 年の英仏戦争（いわゆる「フレンチ・インディアン戦争」）でイギリス側についてからだ。その後、モーガン（Lewis Henry Morgan, 1818–81）による人類学調査によって、その親族組織の特性が明らかにされ、それに影響を受けたエンゲルスが『家族、私有財産および国家の起源』（1884）で彼らの社会形態を「原始共産制」と呼んだことで、イロクォイの名前はさらに広く知られることになる。あるいは現在では、彼らの居住地域がスポーツの「ラクロス」発祥の地になっていることでも有名だ<sup>(3)</sup>。

一方、彼らが 1866 年にパリを訪問したときのことを記録したのは、フランス人宣教師で歴史家のシャルルヴォア（Pierre-François-Xavier Charlevoix, 1682–1761）である。彼は、1698 年イエズス会士となり、カナダのケベックに居住して、アメリカ大陸各地で布教や探検を試みながら関係資料を収集し著書を出した。彼には日本での布教の歴史について記した著書もある<sup>(4)</sup>。そのシャルルヴォアは、『フランス植民地の歴史と総括的記述』（1744）で次のように報告している。

1666 年にイロクォイの人たちがパリにやってきた。彼らは、王宮をはじめとして、この大都市のあらゆる美しい景観を見せられたわけだが、そのいずれを賞賛することもなかった。彼らには、ヨーロッパで最も繁栄しているこの王国の首都よりも、ちいさな村のほうがお好みだったということだろう。じっさい、もし彼らがユシェット通りを見ていなかったら、きっ

とそういうことになったにちがいない。しかし、彼らはこの通りにある屋台風の焼肉屋に行って大いに満足した。そこには、あらゆる種類の肉がいつもどっさりと店頭に並べられていたからである<sup>(5)</sup>。

すでに多くの注釈家や翻訳者たちが指摘しているように<sup>(6)</sup>、カントが『判断力批判』第1部第1篇第1章第2節で具体例として触れているのは、このときにやってきた族長（サチェム）のことである。おそらくカントは、このフランス人宣教師の記述を読んでいた。カントは、すでに『論理学』講義（1772年）でこの箇所を利用しているし<sup>(7)</sup>、また『形而上学』講義（1770年代後半）のなかにも、この出来事が示唆されている<sup>(8)</sup>。

この箇所が含まれている『判断力批判』の第2節は、「趣味判断を規定する満足感は、満足感だからといっても、必ずしも関心に結びつくわけではない」ことを論証する有名な箇所である。ここでカントはまず、関心とは「対象が実在するようすを思い描くことから生じる満足感」とであると定義する。そのうえで、美の判断は、そのような欲求に結びつく対象のイメージとは無関係に、つまり純然たる考察（観想や省察）のなかで下されることが指摘される。すなわち、「趣味の事柄において裁判官を務めるつもりなら、対象の実在に判断を左右されてはならない」というわけである。

ここで問題になるのは（カントは「今そんな話をしているわけではない」と断っているのだが、それを承知のうえで問題にしたいのは）、「（美しいものであることが前提されているらしい）宮殿」に対する4つの（対象の実在に判断を左右されてしまっているらしい）態度である。「ぽかんと口を開けて見つめるだけのために造られた宮殿は好きではない」という反応、「大衆焼肉店がパリではいちばん気に入った」というイロクォイの首長の答え、「人民の汗をこのような無駄な物に投じること」を弾劾する「ルソー風」の怒り、さらには、無人島では、居心地のよい小屋があればそれで充分なのだというロビンソン風

の見解がそうだ。豪華な宮殿を「美しい」と判断するためには、ということはいつまり、そのような「宮殿」を美しいものだと判定するような「趣味」を持っているということを周りの人たちに認めてもらうためには、以上のような対応とは根本的に異なる構えが要求されると、ここでカントは主張している。

## 2 カステイリオーネの「宮廷人」と抑制の美学

他の事例についてはおくとして、カントが「パリのアメリカ先住民」を、美の判定とは無関係の、ないしは美の判定を行う資格がない具体例として引き合いに出した背景には、さまざまな要因が控えている。もちろん、カントが、ヘルダーやフンボルトと並んで、『自然地理学』を講義して著書として出版したことを忘れてはならないだろう。また、よく指摘されるように、キリスト教共同体と啓蒙専制君主という宗教と政治の両面での2つの制度も、ここでは大きな役割を果たしているにちがいない。しかし、ここでは、それらを含みこんださらに広い枠組み、すなわち、そのような諸要因と絡み合いながら成立してきた「人文的教養」という、到達目標としての理念に注目してみたい。

このような「趣味」と「教養」の伝統は、たとえばガーダマーが『真理と方法』で指摘しているように<sup>(9)</sup>、キリスト教的宮廷人の美意識のなかから育まれてきた。この伝統は、おそらく、生活の必要に迫られない「アリストイ」としての自由民の美德や必須習得学芸などに端を発し、中世封建貴族の軍事的かつ政治的な精神、すなわち、戦士としての「勇気」、国王への「誠実」、騎士としての「礼節」などを經由して完成された。そして時代が下ってそこから軍事的機能や道徳的機能が低下することで美的な機能が残ったのである。

イロクォイの首長にはできなかった、宮殿を（利害関係から切り離して）美しいと判断することの社会的意味を考えるうえで、ルネサンス時代の「宮廷人」の理想を明快に解説したカステイリオーネの記述は、多くのことを教えて

くれる。

伯爵、もし、私の思い違いでなければ、宮廷人はその動作、身のこなし、態度、要するにすべての行動に気品 *grazia* をもってのぞむべきだということをあなたは、今夜何度かくり返されました。……しかし、あなたはこれこそ自然と天の賜物である場合が多く、それほど完全でないときには、熱意と努力によって大いに改善することができるとおっしゃいましたので……、あなたのたいへんに必要とお考えになっている肉体の運動のみならず、あらゆる挙措言動においても、こうした気品をかれらが身につけるには、どんな技術が、またどんな修練が、どんなやり方が必要なのかを知りたいと思います<sup>(10)</sup>。

なによりもこの点について有効であると思われるきわめて普遍的な法則を私は見つけました。つまり、それはこの上もなく恐ろしい危険な暗礁から逃れるように、できるかぎり「わざとらしさ *affettazione*」を避けることです。そして新語を用いて申せば、すべてにある種の「さりげなさ *sprezzatura*」を見せることです。すなわち、技巧が表にあらわれないようにして、なんの苦もなく、あたかも考えもせず言動がなされたように見せることです。このことから大いに気品 *grazia* が生じるわけです。というのは、稀なことや立派なことには困難がつきものですが、それをいともたやすくやってのけるとなるとこの上もない賛嘆の念を人の心に呼び起こすものです<sup>(11)</sup>。

時代が下ると、このような本来は（「美しい」宮殿に住む）貴族たちのものであった「趣味」が平民化する。たとえば、絶対王政下のスペインで、腐敗した人間社会の内部での「生き方」について考えたグラシアンは、快感への欲望

から距離をとった「分をわきまえた謙虚さ」を、教養階級の理想だとした。

趣味概念の歴史の始まりにるのがバルタサル・グラシアンだ。グラシアンは、次のように考えることから始める。つまり、彼によれば、感覚的な趣味というものは、わたしたちの感覚のなかでも最も動物的で最も内的なものでありながらも、それにもかかわらず、物事を精神的に判定するさいに遂行される分別作用への萌芽を含んでいる。……趣味 *gusto* という概念は、[動物的なあり方を精神化するという意味で] グラシアンが考える社会的な理想形成のための出発点となる。彼の考える、教養人 *discreto* の理想は、その人 *hombre en su punto* が、人生や社会のどのような物事に対しても、自覚と熟考とともに分別と選択ができるように、正しく距離をとることで自由を確保する点にある<sup>(12)</sup>。

『判断力批判』第2節においてカントが、趣味判断への直接の利害関係の介入を排除した「無関心」性ということを主張する背景のひとつは、以上のような教養の伝統のなかにある。この段階でのカントにとって、美の判定は、生身の身体の中からは沸き起こる荒々しい欲望を、厳しい自己管理によって抑圧できるということを前提とする。美の内容は問わない。欲望を制御することで生まれる形式としての美しさこそ、この伝統のなかでは最も重要視されてきたものであり、あのイロクォイの首長の行動を、その対極に位置させたものである。

### 3 ルソーの「高貴なる野人」と天才の美学

しかし、注意して読めばわかるように、「彼」（名前が伝えられていないのが残念だが）が果たしているのは、たんなる野蛮な悪役ないしは笑われ者という

役割ではない。歴史的コンテクストを考慮してみれば明らかなように、ここでカントは、宮廷人との対比のなかで、その直接的な欲望表現をたんに冷笑しているのではない。カントはここで全面的に「啓蒙」「教養」の側に立って、「未開」の原住民の無知と無作法を全面的にとがめているわけではないのである。

18世紀末のヨーロッパは、時代の大きな転換期にさしかかっていた。産業革命がもたらした社会構造の変化は、伝統的な貴族たちの「常識」と、新興市民階級に共有される道德感覚や美的センスとのあいだに大きな溝を生み出していた。1789年のフランス市民革命直後に出版された『判断力批判』のなかで、当時のケーニヒスベルク大学の学長であったカントは、この両者のバランスをとることに腐心している。たとえば、よく指摘されるように、「趣味」の立場と「天才」の立場との相克関係は、その典型的な例だ。「自然の寵児」としての天才は、無意識のうちに独創的なイメージを直感的に表現することで趣味の枠組みを越えていく。しかし、どちらかと言えばカントは趣味のほうを優先する。彼によれば、趣味は天才を訓育して躰ける。趣味は、天才の翼を切って、それを礼儀にかなった洗練されたものに変えるのである。

このようにカントは基本的には、趣味（人文教養）の側に立って、食欲をむき出しにするあの族長の野蛮さを指摘しながらも、そこに、伝統的なマナー重視の趣味の立場とは正反対の、いわば当時の前衛的な思潮を取り入れようとしていた。あの「彼」は、このテキストのなかに、いわば「トリックスター」として侵入してくる。もちろん、「未開」の地から「連れてこられた」「インディアン」である「イロケーゼ族」の「酋長」が、さしあたって果たさなければならぬ役割は、嘲笑と好奇心の対象となることだった。しかし、「彼」は、しだいに、ある種の尊敬や羨望の的となっていく。文学や芸術の世界では、ロマンティックな自然観が登場し、未開の自然への憧れが成立する「疾風怒涛」時代が始まりつつあった。また、彼が登場した直後の具体例からも推察されるように、ここには、自然状態にある人間を理想化したルソーの考え方が色濃く反



映していると見なければならない。「自然状態」は、それまでは、孤独で惨めで不幸、残忍で野蛮、愚昧で貧しく利己的なものとされてきた。しかしルソーはそれを、社会的不平等の成立以前の自由で平等な社会と特徴づける。理性や知識が未熟ではあるが、そのために、自己保存の（単純な）感情に身がゆだねられ、歪みのかかった都市の生活では失われてしまった人間の本来のあり方がそこにはあったというわけである。

ちなみに、ルソーの『人間不平等起源論』（1755）には、今わたしたちが注目しているカントの『判断力批判』第2節の具体例とほぼ同じ事例が紹介されている。

人々は何度か未開人をパリやロンドンや他の都市に連れてきた。そしてわれわれの贅沢や富や、最も役に立ち最も珍しいあらゆる技術を、熱心に彼らに見せつけた。けれどもそれらすべては、彼らのあいだに愚かな感嘆を引き起こしただけで、それをほしがるような動きはいささかもなかった。とりわけわたしは、30年ほど前にイギリスの宮廷に連れてこられた幾人かの北アメリカ人のなかの、一人の首長の話を出す。人々は何か彼の気に入った贈り物をしようとして、目の前にたくさんのものを示したが、彼の気にとまったらしいものはなにもなかった。われわれの武器は彼には重くて不便と思われた、われわれの靴は彼の足を傷つけ、われわれの衣服は彼には窮屈であり、彼はなにもかもはねつけた。最後に人々は、彼が1枚の毛布をとって、それで肩を包んで喜んでいるらしいのに気がついた。「すくなくともあなたは、この品が役に立つことは認めるでしょうね」とすぐさま人々は彼に言った。「ええ」と彼は答えた。「これはけだものの毛皮とほぼ同じくらいよさそうです」。もしも彼が雨のときにその両方を着てみたならば、そうは言わなかったであろう<sup>(13)</sup>。

ここでは、理想的な自然状態と、それから遠く隔たってしまった近代的な都市生活とが見事に対比されている。あのイロクォイの族長がそうであるように、ロンドンにやってきたこの先住民たちにとっても、「役に立つ」のは自分たちの生活現実と直結したものであり、彼らがそれ以外のものに美的な興味を示すことはありえない。そして、そのような「高貴なる野人」の態度のなかに、伝統的なマナーにもとづく美的な教養や趣味に取って代わる率直で生命感にあふれる新たな価値意識を見出しはじめたのが、カントを含めた初期近代（「モデルネ」）の市民社会の美意識だったのである。

#### 4 プリミティヴィズムの美学へ

『判断力批判』第2節に出てくる具体例が示唆している二項対立の関係は、図式化して示すと、次のようになるだろう。

啓蒙（社会・人工美）	：	未開（野生・自然美）
カステリオーネ	：	ルソー
ロココ趣味（貴族）	：	サンキュロット（市民）
制度（旧体制）派	：	実感（革命）派
理性の重視	：	感性の重視
洗練，マナー，教養	：	虚飾の否定，素朴な生命感
「趣味」の立場	：	「天才」の立場
抑制（規律と訓練）	：	解放（はばたく翼）

ここからもわかるように『判断力批判』におけるカントは、たとえばカステリオーネとルソー、あるいは「趣味」と「天才」という正反対の立場を同時に取り込もうとしていた。両者の均衡関係を維持するためにカントが払っている

配慮は並大抵のものではない。

ところが、この微妙なバランスは、カント以後になると、大きく崩れていく。あの首長が焼肉レストランを気に入った理由は、食欲を単純に満たしてくれたからというよりも、むしろ「そこには、あらゆる種類の肉がいつもどっさり店頭に並べられていたから」ということが大きく関わっていた。19世紀以後の「近代的」な芸術家たちは、このような「野蛮さ」の表現に傾倒していくようになる。

最初は、オリエントのスルタンたちの「残虐」な行為をことさらに描いたロマン主義の詩人や画家たちの想像力のなかに、この「野蛮」への志向が登場する。それは、ゴッゲンやドイツ表現主義者たちによるタヒチやパラオなどの「未開」の島々への関心を刺激し、20世紀初頭には、芸術家たちによるアフリカの仮面やアメリカのカチナ人形へのコレクション熱につながる。一方、音楽の世界ではストラヴィンスキーが原始的なリズムを力強く表現した。また、美術の世界では、「フォーヴ（野獣）」や「アール・ブリュット（生の芸術）」といった直接的な呼称で、当初は軽蔑的な意味であれ、特徴づけられたり、あるいは積極的に自らの芸術的信念を表明する作家も現れることになる。

プリミティヴなものを、単純に「未開」とはとらえず、むしろ根源的で原初的なエネルギーに満ち溢れた美的なものにとらえるこの傾向は、ヨーロッパに広がっていた退廃の自覚と連動しながら、理論面でも強化されていった。たとえば、美や芸術における原始的な生の衝動に光をあてたニーチェは、その代表的な例である。ただし、ニーチェの場合もそうだが、近代の理論家たちのなかでは、プリミティヴなものがもつ美的な側面が一面的に強調されていたわけではない。「野生の思考」を進化論的偏見から解放した人類学のレヴィ＝ストロース<sup>(14)</sup>や、プエブロ・インディアンたちの呪術的な儀礼のなかに象徴行動による「思考空間」を見出した美術史学者ヴァールブルク<sup>(15)</sup>、さらには、自然と文化を非合理的に調停する美や芸術のなかに暴力とエロティシズムを読み取

ったバタイユ<sup>(16)</sup>などの議論からも窺えるように、明らかにされていったのは、文明の未開性と未開社会の文明性という、いわば「啓蒙の弁証法」と言ってよい止揚不可能な両義的状况だったのである。

## 5 結 論

カントが、「超越論的な」議論の展開を読者に印象づけるためにおそらくは何気なく差し挟んだ具体例は、わたしたちに、当時の社会的なコンテクストを垣間見せてくれる。パリの街をこれ見よがしに見物させられたイロクォイの首長は、カントのテキストのなかで、いわゆる「未開」の「部族民」に対して18世紀末のヨーロッパ人が感じていた両義的な感触にもとづいて、嘲笑と尊崇のあいだを揺れ動く微妙な位置に置かれていた。この例が示すように、これまでもよく指摘されてきた『判断力批判』のテキストが見せる「不整合」は、内部で論理的に解決されるだけではなく、外的（社会史的）コンテクストとの連関で説明できる部分が多いのではないか？ そのことを明らかにするためには、外へと開かれた「窓」としての具体例について、今後もさらなる解釈の試みが必要になるだろう。

### 註

- (1) Kant, I. *Kritik der reinen Vernunft*, B 370.
- (2) Panofsky, E. “Zum Problem der Beschreibung und Inhaltsdeutung von Werken der bildenden Kunst”. In: *Aufsätze zu Grundfragen der Kunstwissenschaft*, hrsg. v. H. Oberer und E. Verheyen. Berlin: Verlag Volker Spiess, 1980, S. 92.
- (3) イロクォイをはじめとするアメリカ先住民の文化と歴史については、ウォシュバーン『アメリカ・インディアン：その文化と歴史』（富田虎男訳、東京：南雲堂、1977）、ウィルソン『森林インディアンイロクォイ族の闘い』（村山優子訳、東京：思索社、1991）などを参照。
- (4) Charlevoix, Pierre-François-Xavier de. *Histoire et description générale du Japon*. Paris :

- J. M. Gandouin [etc.], 1736.
- (5) Charlevoix, Pierre-François-Xavier de. *Histoire et description générale de la Nouvelle France*, avec le Journal historique d'un voyage fait par ordre du roi dans l'Amérique Septentrionale. Paris : Chez Rollin fils, 1744, vol. 3, p. 322.
- (6) テキスト, 翻訳, 注釈書として以下のものを利用した。Kant, I. *Kritik der Urtheilskraft*, *Kant's Gesammelte Schriften*, hrsg. v. d. Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 5, Berlin : G. Reimer, 1913 ; *Kant, I. Kritik der Urtheilskraft*, hrsg. v. Karl Vorländer, Leipzig : F. Meiner, 1913 ; *Kantstudien*, Bd. 1. 1897, S. 155 f. ; Kant, I. *Critique of the power of judgment*, ed. by Paul Guyer, transl. by Paul Guyer and Eric Matthews. Cambridge : Cambridge University Press, 2000, p. 367 ; カント『判断力批判 上』(牧野英二訳, カント全集 8), 東京 : 岩波書店, 1999, p. 281 ; 金田千秋「カント『判断力批判』翻訳の試み : 一節から二十二節まで」『芸叢』vol. 13, 1996, pp. 1-64.
- (7) *Logik Philippi*, 24 : 353.
- (8) *Metaphysik L*, 28 : 251.
- (9) Gadamer, Hans-Georg. *Wahrheit und Methode : Grundzüge philosophischer Hermeneutik*, Tübingen : J. C. B. Mohr, 1960, S. 21, 32.
- (10) カステイリオーネ『宮廷人』(清水純一ほか訳), 東京 : 東海大学出版会, 1987, 1 : 24. -
- (11) カステイリオーネ『宮廷人』, 1 : 26.
- (12) Gadamer, a.a.O., S. 32.
- (13) ルソー「人間不平等起原論」『ルソー』(小林善彦訳, 世界の名著 30), 東京 : 中央公論社, 1966, pp. 220-222. (訳語の一部を変更した)
- (14) レヴィ＝ストロース『野生の思考』(大橋保夫訳), 東京 : みすず書房, 1976.
- (15) ヴァールブルク『蛇儀礼 : 北アメリカ, プエブロ・インディアン居住地域からのイメージ』(加藤哲弘訳, ヴァールブルク著作集 7), 東京 : ありな書房, 2003.
- (16) バタイユ『エロティシズム』(澁澤龍彦訳, ジョルジュ・バタイユ著作集 7), 東京 : 二見書房, 1973.

(文学部教授)